

ALSの人と介助者による「口文字」の習熟に関する相互行為論的考察

——在宅における医療的ケアとコミュニケーション——

北星学園大学 水川 喜文

1. 目的

本研究は、在宅で医療的ケアを受ける ALS (Amyotrophic Lateral Sclerosis, 筋萎縮性側索硬化症) の人と介助者が、「口文字」というコミュニケーション方法を用いてどのように相互行為を行っているか、その習熟という点に注目して、エスノメソドロジー・会話分析の知見を用いて考察することを目的とする。

2. 方法

本研究では、ALSの人の介助場面の録画データを用いて、「口文字」に熟練した介助者と相対的初級の介助者を比較検討することで、この特定の相互行為を習熟するとはどのようなことか、エスノメソドロジー・会話分析の視点から考察する。

「口文字」とは、橋本(2009)が開発した「声」を使わないコミュニケーション方法である。(五十音盤を思い浮かべながら) 障害当事者が母音の口の形をして(例:「い」)、介助者が、その「行」を発音して(例:「い、き、し、ち…」)、当事者がマバタキなどで合図することで一文字ごと確定して会話をする方法である。この領域におけるエスノメソドロジー・会話分析研究では、Hoermeyer(2012)が透明文字盤の相互行為分析をしているもののほとんど蓄積は無い。これまでの研究(水川 2013)では、第一に、共有知識やそれに基づく予期的解釈の可能性、第二に、理解の不達成場面における修復の技法、第三に言葉の補完における(場面固有の/常識的な)前提的知識の利用について指摘されている。

本研究においては在宅で医療的ケアを受けながら生活するALSの人と介助者に協力と承諾を得て撮影した15時間以上のビデオデータを用いる。これには、当事者へのインタビュー、在宅での日常会話、医療的ケアの場面、機器の設置場面などが含まれている。

3. 結果と結論

本研究では、「口文字」の熟達には、ALSの人と介助者との予期的解釈、修復の技法、前提的知識の利用などが、相互に、時に重複して利用されることにより方法的洗練化が行われていることが明らかになった。例えば、当事者が「単語+助詞」を伝えた時点で、介助者が次の「単語」を予期して当事者に確認し、身体の向きを変えて(指向(orientation)の変更)、質問者に「応答」として発話するなどである。このように当事者と介助者が「口文字」で「しゃべる」ときに「見えているが気づいていない技術」があり、それは両者の継続的關係(専属や自選の介助)における実践で習熟され洗練されてくることが示された。

○本研究は、科学研究費助成研究(挑戦的萌芽研究)「在宅における医療的ケアの実践と論理——エスノメソドロジー・会話分析の視点から——」の成果の一部である。

文献

Hoermeyer, Ina (2012) "The importance of gaze in the constitution of units in Augmentative and Alternative Communication (AAC), in Pia Bergmann, Jana Brenning, Martin (2012) Pfeiffer & Elisabeth Reber (Eds.), *Prosody and Embodiment in Interactional Grammar*, Berlin: de Gruyter, pp237-262.

水川喜文(2007)「障害者介助実習の実践学」, 山岸健責任編集『社会学の饗宴I』, 三和書房, pp351-73.